

「ぶどう酒になった」

2005.6.26 赤羽聖書教会主日礼拝説教

1. それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。
2. イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。
3. ぶどう酒がなくなったとき、
母がイエスに向かって
「ぶどう酒がありません。」と言った。
4. すると、イエスは母に言われた。
「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。
女の方。
わたしの時はまだ来ていません。」
5. 母は手伝いの人たちに言った。
「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」
6. さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、
それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。
7. イエスは彼らに言われた。
「水がめに水を満たしなさい。」
彼らは水がめを縁までいっぱいにした。
8. イエスは彼らに言われた。
「さあ、今くみなさい。
そして宴会の世話役のところに行って行きなさい。」彼らは持って行った。
9. 宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。
それがどこから来たのか、知らなかったのですが、しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた。
彼は、花婿を呼んで、
10. 言った。
「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、
人々が十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、
あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取っておきました。」
11. イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行ない、ご自分の栄光を現わされた。
それで、弟子たちはイエスを信じた。

説教

今日の話の中でお酒の話が出てきますので、一言最初に解説しなければなりません。

イエスさまはぶどう酒を飲まれたことは事実ですし、酒を飲むことそれ自体が悪とか罪と言うわけではないと思います。ただ、「酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。」と使徒パウロが言うように、酒を飲むことによってその人の人格や生活、人生に支障を来すとか、家庭を崩壊させるような飲み方はいけない、というわけです。アルコール依存症になるような飲み方は、明らかに聖書が禁じる飲み方だと思います。また、そのような弱い人々に配慮して、キリスト者として、自分は（酒を飲むキリスト者の自由はあるけれども）敢えてキツパリ飲まないという生き方も、正しい、神さまがお喜びになる生き方だと思います。これから読んでいく内容は、必ずしも酒を必要以上に美化するものではないということを確認しておく必要があると思います。

- 1 . それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。
- 2 . イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。

イエスさまは、地元ガリラヤにあるカナの婚礼に出席なさいます。イエスさまの母マリヤも出席し、イエスさまの弟子たちも一緒に出席しました。2節を見ると「招かれた」とあるので、マリヤの親族なのか地域の友人なのかわかりませんが、いずれにせよよく知った間柄だということで、イエスさまは、その弟子たちまで「招かれ」て、婚礼に参加したのでした。

ユダヤでは、婚礼は一大行事です。祝宴の催しは少なくとも一日以上、長ければ一週間以上にわたって行われました。その際、今日私たちが考えるような新婚旅行は行いません。新婚夫婦は家にとどまって、一週間家庭を解放します。二人は冠をかぶり、王と王妃のように振る舞いながら、自分たちの結婚を思いっきり喜び祝ったのでした。ですから、苦勞多き人生に於いて、結婚式は、この上なき喜びの時です。特に、ご馳走を振る舞いながら、おいしい物を飲み食いすることは、貧しい食事をしてきた昔の人々にとっては、天国の祝宴にあずかっている喜びを感じさせる、とても幸いな一時でした。

イエスさまは、こうした、新婚夫婦にとってこれ以上ない、人生最高の喜びの席に御臨席なさいました。その目的は、これから結婚生活を送るふたりを祝福なさるためです。イエスさまは結婚する者たちを祝福なさったのでした。

私たちは、この結婚式にわざわざ御臨席なさったイエスさまのお姿を軽く見てはなりません。結婚式という極めて世俗的な儀式にイエスさまは参席なさったのです。結婚することを軽んじたり蔑視する考えもありますが、意味のない儀式なら、イエスさまが参加なさるはずがありません。価値のない儀式なら、イエスさまが御臨席なさるはずがありません。イエスさまがそこに参加なさったのは、人の結婚が尊いものであるからです。

価値あるものであるからです。

結婚とは本来結婚する価値のある、素晴らしいものであるからです。

だからこそ、イエスさまはカナの婚礼に出席なさいました。

その際の、結婚に寄せるイエスさまの眼差し、ご期待、御心というものを思わざるを得ません。

「神はまた、彼らを祝福し、」（創世記 1:28）とあるように、

もともと神さまが最初の人間アダムとエバを造られた時、神さまは彼ら夫婦（家庭）を祝福なさいました。

人の結婚は神さまに祝福されたのです。

しかし、人が墮落して以降は、人の結婚も家庭も罪の故に神さまに呪われてしまいます。

それで、人にとっては必ずしも結婚することが幸せに至る道ではなくなってしまいました。

しかし、そうではあっても、

ガリラヤのカナの結婚式にイエスさまが参席なされたことが物語る重要な真実は、

人の墮落にもかかわらず、それでもなお神さまが人間の結婚を祝福してくださっている、という事実です。

そして、その祝福は、人類の救い主であられるイエスさまを通してもたらされます。

イエスさまこそが、罪に呪われた私たちの結婚に、真の回復と祝福をもたらしてくださるのです。

それでは、イエスさまは、この時、どのようにして結婚するふたりを祝福なされたのでしょうか？

それは、一言で言うと、水をぶどう酒に変えることによってです。

結婚の祝宴もたけなわの頃、宴会の盛り上がりとは裏腹に ぶどう酒が完全に底をついてしまいます。

人生最高の喜びの時なのに、ぶどう酒がなくては祝宴になりません。

また、ぶどう酒が無くなってしまったと、笑ってすまされるものでもありません。

宴会の世話役も、結婚する当人たちも、世間の笑いものとなってしまいます。

参席者が予想より大量にぶどう酒を飲み過ぎたからか、

あるいは招かれざる客も来たりして参席者が予想より多かったからかはわかりませんが、

いずれにせよ、はっきりとわかることは、新婚夫婦が（おそらく）貧しくて、十分なぶどう酒を準備できなかったということです。

これは人生の門出を祝う晴れの行事の時に、何とも人生の一大危機です。

彼らのこれからの多難な人生を暗示するかのような、大きな試練です。

そこで、新婚夫婦と親しい間柄と思われるマリヤがイエスさまに窮状を訴えます。

「ぶどう酒がありません。」

3. ぶどう酒がなくなったとき、

母がイエスに向かって

「ぶどう酒がありません。」と言った。

この「ぶどう酒がありません。」という母マリヤの言葉は、

要するに、息子のイエスさまに「ぶどう酒が無くなったから、何とかしてやりなさい。」というニュアンスも含んでいると思います。

母だから、

自分の息子に、しかもその息子は人助けすることのできる、力あるメシヤであるはずだ、だから何とかしてくれというわけです。

しかし、イエスさまは、この母親の頼みを冷たく突き放します。

4 . すると、イエスは母に言われた。

「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。

女の方。

わたしの時はまだ来ていません。」

「女の方」という言い方は、決して失礼な言い方ではありません。

「ご婦人」という呼び方になると思いますが、ローマの皇帝アウグストゥスもクレオパトラにこの言葉で呼びかけました。

イエスさまが十字架にかかる時も、マリヤに対して、この呼び方で呼びかけ、「そこにあなたの息子がいます。」と弟子を指しました。

だから、ここでは、イエスさまは、ご自分がもう母親のもとにはいない、自立して公生涯に入ることを宣言しておられるのです。

マリヤは確かに自分を生んだ母親です。

でも、そうした肉の絆、あるいは義理によってこれから事をなすものではありません。

イエスさまは、これから家を捨てて公生涯に入られるのです。

父なる神の御心を行って、みわざをお始めになるのです。

それが、ここの言葉の意味です。

「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。

女の方。

わたしの時はまだ来ていません。」

この言葉を聞いたマリヤは、

イエスさまがこの危機を救ってくださることを確信して、手伝いの人たちに言います。

5 . 母は手伝いの人たちに言った。

「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」

そうして、イエスさまは、彼らにその家にあった六つの大きな石がめに水をいっぱい満たさせます。

6 . さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、

それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。

7 . イエスは彼らに言われた。

「水がめに水を満たしなさい。」

彼らは水がめを縁までいっぱいにした。

そうして、それらの水すべてを最高に上質のぶどう酒に造り変えられたのでした。

8 . イエスは彼らに言われた。

「さあ、今くみなさい。

そして宴会の世話役のところに行って行きなさい。」彼らは持って行った。

こうして祝宴は最後まで続けることができました。

のみならず、その最上のぶどう酒の故に、花婿は宴会の世話役に絶賛されたのでした。

9 . 宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。

それがどこから来たのか、知らなかったので、

しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた。

彼は、花婿を呼んで、

10 . 言った。

「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、

人々が十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、

あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取っておきました。」

ヨハネはこの事件を振り返って解説します。

11 . イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行ない、ご自分の栄光を現わされた。

それで、弟子たちはイエスを信じた。

この奇跡が、イエスさまが救い主であられることを示す「最初のしるし」だと言うのです。

そして、この奇跡を通して、イエスさまの弟子たちが、イエスさまを信じた、

イエスさまの弟子たちが、メシヤ・救い主としての栄光を見て、イエスさまをメシヤと信じた、のです。

ぶどう酒が底をついたという事実は、いかにも間抜けな話です。

80 - 120 ㍺の瓶が六つあっても、用をなしません。

人間の知恵の浅はかさ、貧しさを象徴しているようです。

一生懸命によくよく考えて、準備したんだけど、

全く話にならないほど足りない、欠けだらけで、

自分の「晴れ」の舞台が「恥」の大舞台となり、

「喜び」の祝宴が「空しさ・侘びしさ・無力感」を味わう葬式と化してしまうような、

神さまの祝福どころか罪に呪われた現実を味わうことになってしまうようになる出来事です。

これが罪に呪われた人間の現実です。

どうしようもない。

どうしようもなく、欠けだらけです。

神に見捨てられたような、呪われた現実です。

しかし、イエスさまは、そのような私たちの日常のただ中に来てくださいました。

呪われた結婚式のただ中にご臨席くださったのです。

そして、そこで人間たちがあくせくとなしていき、
まことに話にならない、どうしようもない現実、一切の罪に呪われた人間の現実を、すべて受け止めてくださいました。
そして、
水を変えてぶどう酒となし、
貧しい夫婦に救いをもたらし、
地上の罪深い人間の欠けだらけの祝宴を変えて、天上の大宴会に全く新しく造り変えてくださったのです。

昔から、豊かなぶどう酒は、救い主の至福の王国を象徴するものとして語り伝えられて来ました。
出エジプトを記念する過越の祭りにもぶどう酒が飲まれました。
そして、後に、
イエスさまは、最後の晩餐の席で、ぶどう酒をご自身の血をあらわすものと呼んで「これを飲め」と言われます。

十字架で流されたイエスさまの血が私たちの罪を清めます。
イエスさまの血が私たちの人生を清めます。
イエスさまの血が私たちの家庭を清めます。
イエスさまの血が私たちの結婚を清めて、意味あるものとするのです。

イエスさまがおられなければ、
カナの婚礼も人間の足りなさを痛感するだけのただの呪われた祝宴となっていたことでしょう。
しかし、イエスさまがおられたから、
神の栄光を見て、神さまをあがめて、神さまに感謝する、御国の大宴会さながらとなったのです。

イエスさまこそ、私たちの結婚生活を真の喜びで満たすお方です。
水を変えてぶどう酒となすお方です。
味気のない水を変えて、美味しいぶどう酒としてくださいます。
呪われた葬儀の宴会を、祝された喜びあふれる御国の祝宴に変えてくださいます。
呪われた家庭を、祝福に満ちた家庭に変えてくださるのです。

それは、私たちが、カナの新郎新婦のように、イエスさまを「招いた」時からです。
そして、マリヤのように、イエスさまに「ぶどう酒がありません。」と自分の窮状を訴えた時からです。
そして、「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」との言葉に促されて、
「手伝いの人たち」「水汲みのしもべたち」のように、イエスさまのみことばに従った時からです。
その時、彼らは、主の栄光を見ました。
水をぶどう酒に変える奇跡を目撃しました。
人々に惜しみなくぶどう酒を振る舞おうとするイエスさまのメシヤとしての栄光を見たのです。

私たちは罪深くて、何も無くても、欠けだらけでも、あらゆる物に不足しても、

新婚夫婦のように、イエスさまを自分の家庭にお招きすれば、十分に満たされます。

マリヤのように、「ぶどう酒がありません。」と正直に窮状を訴えれば、イエスさまに聞いてもらえます。

そして、水汲みのしもべたちのように、イエスさまのおことば通り、ひたすら愚直に水を汲み続ければ、主の栄光を見ます。

自分たちの目の前で、水がぶどう酒に変わるんです。

メシヤとしての栄光を見ます。

私たちも、

新郎新婦のように、イエスさまをお招きし、

マリヤのように、イエスさまに頼り、

しもべたちのように、イエスさまのみことばの通りに生きて、主の栄光を見、

イエスさまの弟子たちのように、主の栄光をあらわす人生を生き、

主の栄光をあらわす家庭を築いていくことができるよう、主の御名により祈ります。